

守るべきもの

私たちがこの土地に住み着いて一年が経った。

かつては都でかなり手広く商いを営んでいた父が、商売上の揉め事に巻き込まれた挙句、無実の罪を着せられて三年間の流刑とされた為に、それまでに築き上げられたものが全て失われてしまった。

父が三年間の刑に服している間に、元々がお嬢様育ちで世間知らずの母が、私たち二人の生活を支える為に苦勞し、そして父の無実を信じて再吟味を行なってもらうよう、お上に必死に働きかけたが、母の訴えは通じなかった。

三年が経って、父が流刑地から戻ってきてからは、ご近所さんや顔見知りの人々の態度が一変した。

前科者の烙印である、流刑地ごとに独特の紋様を施した焼印を額に刻まれた父は、『流刑者（るけいもの）』として敬遠され、その家族である私たちも同様の扱いを受けた。

一度犯罪を犯した者は、罪に応じた刑に服した後も尚、前科者として世間の偏見の眼差しを浴びながら生きなくてはならない。

一度犯した罪の記録が一生消えない、生涯にたった一度きりの過ちを犯した者にとっては生き辛い社会だった。

生まれ付いた土地から追われる様にして、幾つもの町や村を転々とした後、ようやく人里離れた山間の僻地に私たちは辿り着いた。

当初はこの地に留まるつもりではなかったが、元々体の弱かった母が体調を崩し、また、たまたま放置されてしばらく経つだろう小屋を見つけた為、母の体調が戻るまでの、雨露を凌ぐ仮の宿として逗留を始めたのが、かなりの長居となってしまった。

母の体調は回復する気配を見せず、それどころか寝込む様になってしまって、これ以上の旅は断念せざるを得なくなった。

小屋は所々朽ちかけていたが、今の私たちにとっては雨露を凌げるだけでもありがたい事で、それ以上の贅沢を言える立場ではなかった。

私は父から預かった残り少ない旅の資金を手に町へ出て、鍬と鎌を一つずつ購入した。

流刑者の焼印を押された父では、幾らお金を持っていたとしてもまともに取り合ってくれない可能性があったからだ。

作物の種は、鍬と鎌を買った町の周辺で、何件もの農家を回って頼み込んで、ほんの少しずつだけ分けてもらった。

麦や粟など雑穀の種と、何種類かの野菜の種だ。

父も私も農作業の経験は無かったが、旅の資金は残り少なく、母は病に臥せって、流刑者の父も町に出て職を得る事が出来ない以上、生きる為にはこうするしかなかった。

私たちは残った旅の資金を全部はたいて、最低限の生活必需品を揃えた。

ここで失敗すれば、家族共々飢えて死ぬしかない……悲壮な覚悟の元、この土地での生活が始まった。

小屋の周辺の土地を開墾し、作物の種が蒔けるようになるまでは悲惨だった。

幸いにも、食用可能な植物や木の実が手に入る山間部だったので、飢え死にだけは免れたが、ふらふらしながら毎日すき切ったお腹を抱えて、食べられる野草や木の実を集める傍ら、少しずつ土地を開墾していく日々が続いた。

それから一年がたって、未だに野草や木の実集めもするが、何とか畑の作物も取れるようになってきたので、その頻度は減っていた。

貧しいながらも、私と父は徐々にこの土地で生活する事に慣れていったが、母の容態はますます悪化するばかりだった。

ただでさえ体調を崩しているのに、ろくな食べ物を食べていないのだから、具合が良くなる道理は無かった。

しかし、今となっては、母に滋養のつく食べ物を食べさせるお金も、医者に診せるお金も無かった。

何とか母にはこのまま頑張ってもらって、その間に少しでもたくさんの作物が取れるように、これまでより一層仕事に精を出すしかない。

父と私は改めてそう心に秘めて、更に畑作業に打ち込んだ。

彼らが私たちの元を始めて訪れたのは、ちょうどその頃だった。

三人の少年が小屋の傍を通りかかり、畑仕事を黙々とこなしていた父と私を見つけたのか、三人が畑の傍に近づいてきた。

三人のうちの一人が、私に声をかける。

「お前、ここに住んでいるのか？」

「うん」

この土地に来て以来、父と母以外の人と初めて喋って、私はちょっと嬉しくなった。

「ふうん。それにしても、随分汚い格好だな」

少年が言うのも当たり前だった。

この一年というものの着の身着のままで、まず食べる事を優先で生活してきたのだ。

更に連日の農作業で泥に塗れていたから、汚いといわれても単に見たままの事実でしかない。

しかし、私と同年代の少年から直接『汚い！』と断言されたのは、とてもショックだった。

私だってこんな格好で居たくは無い。

華やかな模様の着物だって着たいし、かんざしを差したりといったおしゃれも楽しみたい。

でも、今の私にとって、それは叶うべくも無い見当違いの儚い望みだったし、絶対に叶わない事が予めわかっているから、望みをかけても自分が後で苦しむだけ。

私だって、好きでこんな格好をしているのじゃないのに。

私は、少年の言葉には無言で答えた。

悔しくて、涙が溢れそうになった。

でも、ここで少年達に涙を見せるのも悔しかったから、キッと唇を真一文字に閉じて、間

違って涙が流れてしまわない様に必死に耐えた。

最初に少年に話し掛けられた時はちょっと嬉しかったけど、今は顔も見たくは無かった。

私は、努めて少年達の方を見ない様に、畑作業に意識を集中した。

早くどこかへ行って！

そればかりを頭の中で叫んでいた。

きっとこのまま無視していれば、そのうち飽きてどこかへいってしまいうに違いない。

父や母以外の人とも色々なお話をしたいとは思いうけれど、あんな意地悪な子は嫌。

あんな子と話をするくらいなら、さっさとどこかに消えて欲しい。

そして、もう二度とここには来ないで欲しい。

それから、少年達は私をバカにする様な言葉を、二言三言言った様な気がするが、私の耳には一切入ってこなかった。

そのまま少年達はどこかへ行ってしまった。

「本当はお前もおしゃれの一つもしたいだろうに、苦労をかけてすまない」

少年達の姿がすっかり消えてから、父が気を使って声をかけてくれる。

父が流刑者の烙印を押されてしまった為に、私たちは今の困窮に喘いでいるのだから、父が責任を感じるのは仕方ないと思う。

でも、父が流刑を強いられたのは何かの間違いだし、父は流刑に服する様な悪い事の出来る人ではない。

それは何よりも、父の家族である私や母が一番良く知っている。

でも、私たちの訴えに耳を傾けてくれる人は誰もいなかった。

「父さまは何も悪くない。悪いのは、父さまを間違えて流刑にした人たちでしょう？」

私は縋る様に父の顔を見上げた。

流刑に服した三年と、この地に移り住んでからの一年の歳月が、酷く疲労困憊した様な深い皺を、父の顔に幾つも刻み込んでいた。

「確かに、私は天地神明に誓って、お縄を頂戴するような悪事は一切働いていない。それだけはお前にも自信を持って言える。しかしな、もう済んでしまった事を後から嘆いてみてもどうにもならない。幾ら恨み言を並べても、それで食べる物が手に入る訳でもなく、何かが急に変わる訳でもない。それに、そうやって嘆いたり、恨んだりしても、返って自分の心が貧しくなるだけだ。今は日々の食べ物にも困るほど貧しくなってしまったが、せめて心の中だけはもう少し豊かにしよう。心の豊かさは、その人の気持ち次第で保てるのだからね」

父の優しく教え諭す言葉に、私は思わず胸が熱くなった。

本当は父こそ私よりも母よりも、何倍も何十倍も悔しい筈だからだ。

私は、父のやりきれない心情と、それでもなお私たちを励まし、絶望の淵から這い上がろうと必死に格闘する姿に、一瞬でも恨み言を漏らしてしまった事を後悔した。

「ごめんなさい」

土で汚れた私の頬を涙が伝った。

「謝る事はないよ。世間の誰が何と言おうが、お前や母さんが、そうやって私の無実を信じ

てくれているからこそ、私はとても勇気付けられているのだから。ただ、誰かに恨み言をいうくらいなら、その分の気持ちを、少しでも早くこの貧困から抜け出す方に使おう。そうすれば、お前にも、母さんにも、もう少し楽な暮らしをさせてやれるからな」

「うん」

やっぱり父さまは凄い。

私の心の中にも、私たちをこの様な悲惨な運命に陥れた人たちへの、そう簡単に割り切れない感情が燦っているが、父はその気持ちを仕事にぶつけようと言っているのだ。

それならば、ただ恨み言を繰り返すよりも、私たちにとっては何倍も良い事がある。

より多くの仕事をすれば、それだけ少しでも作物が取れるようになる。

もう二度と飢えなくてすむのだ。

「さあ。仕事を中断してしまったが、もう少しやってしまおう」

「うん」

私は、土を被った薄汚れた手で、頬を伝う涙を拭いた。

＊

おいら達三人は、村から少し離れた山のふもとで、偉く古びた一軒の小屋の前を通った。

「なんか、お化けが出てきそうな小屋だな」

そんな事を話しながら、ふと小屋の脇を見ると、父親らしき男と、おいら達と同年くらいの女の子が、黙々と畑作業をしている。

「おい、ちょっとからかってやろうぜ」

誰からともなくそんな話になり、おいらは畑のすぐ脇から女の子に声をかけた。

「お前、ここに住んでいるのか？」

「うん」

女の子がこっちを向いた。

瞳がクリッと丸くて、ちょっと可愛い子だったが、全身泥まみれの見るからに汚らしい格好をしていた。

「ふうん。それにしても、随分汚い格好だな」

何となく口をついて出た言葉に、女の子はムッとして下を向いてしまった。

『なんか変な事言ったかな？』っと、女の子がムッとした理由は良く分からなかったが、でも、言ってしまった事にはちょっと後悔した。

「なあ、こっち向けよ」

「何無視してるんだよ」

二人は口々に女の子に言っていたが、それ以上おいらは何も言わなかった。

二人は暫し女の子をからかう言葉を投げていたが、余りにも女の子が嫌がっている様だったので、おいらは二人の調子に乗ったからかいを止めさせた。

「そろそろいこうぜ」

二人も、女の子が余りに何の反応も示さないのが面白くなかったのか、すぐに女の子をからかうのを止めて、その場を後にした。

「しかし、あんなところに人が住んでいるなんて、驚いたな」

「そうだな、あれじゃまるでお化け屋敷だ」

「ほんっと、すぐにでもぶっ倒れそうだったからな」

「あの小屋もそうだけど、あの子や父ちゃんも汚らしかったな」

「もしかしたら、お化け屋敷に住む妖怪なのかもよ」

「まっさかあ。妖怪が畑仕事なんかするかよ」

村への帰りの道すがら、二人は先ほどの小屋や女の子たちの事を、言いたい放題誹謗中傷していた。

おいらはその会話には加わらず、さっきの女の子の事をぼんやりと考えていた。

確かにパッと見は汚らしかったが、あのクリッと丸まった眼はとても可愛かった。

あんな目をした女の子はこの村にだって一人もいない。

もし体中の泥を全て洗い流して、可愛い花の模様の着物でも着て、きらきら光るかんざしでも付けたら、どこかのお城のお姫様にだって見えるかもしれない。

それにしても、おいらの不用意な一言が、女の子の気分を損ねてしまったらしい事には、ちょっと後悔していた。

今日はじめて出会って、いきなり怒らせちゃったから、もしかしたらとっても嫌われたかも知れない。

もう少し話をしてみたかったのに。

家に戻ると、ちょうど父ちゃんも畑仕事から帰ってきた所だったので、あの小屋の事を父ちゃんに聞いてみる事にした。

「父ちゃん。今日、山の方に行ったら、すぐにも倒れそうな汚い小屋があったんだけど、前からあったの？」

「あんな所までほっつき歩いてたのか。あの小屋はな、昔、この村に住んでた奴が村の禁忌を破ってな、村を追い出された後、自分であそこに小屋を建てて住んでたんだ。お前も関わると村に住めなくなるから、近づくなよ」

「わかったよ。そうしたら、あの女の子と父ちゃんはこの村に住んでたんだ……」

父ちゃんはいきなり怪訝な顔をした。

「女の子だって？ あいつに女の子などいないし、それはもう何十年も前の話だから、今生きてればヨボヨボの爺になってると思うがな」

「えっ？ あの子の父ちゃんだって、ヨボヨボの爺ではなかったよ」

「ふーん。お前の言う事が本当だとすると、それは訳ありのよそ者かも知れないな。わざわざ人目につかないそういう所に移り住む奴は。そうするとあの爺はとっくにくだばったかもな。あの爺も相当執念深い奴だったから、化けて出てくるかも知れない。良くそんな小屋に移り住むもんだ。くわばらくわばら」

父ちゃんの話に、おいらの背筋にも冷たいものが一瞬走った。

小さい頃においらの夢の中に出てきて、心臓が飛び出る思いを度々させられた、あの時の気持ち悪い化け物の顔が一瞬ちらついたからだ。

「とにかく、そんな気味悪い小屋には、絶対に近づくんじゃないぞ。わかったな」

「うん」

父ちゃんに釘をさされたが、おいらは生返事を返してお茶を濁した。

そんなに気持ち悪い幽霊が化けて出るのかも知れないなら、あの女の子に教えてあげないと可哀想だ。

それに、こちらから『そういうとても怖い小屋ですよ』と教えてあげる事で、女の子に感謝してもらって、一度損ねてしまった印象を元に戻してもらえるかも知れない。

そうしたら、もう少しあの子と色々な話が出来るかもしれない。

もし明日もあの小屋へ行くのなら、今度はおいら一人で行ってみよう。

あいつら二人も一緒だと、絶対にあいつらは女の子の事をからかうに決まってるから、おいらがあいつらの同類だと勘違いされてしまう。

そして次の日、おいらは一人でこっそり女の子の小屋に行こうと思ったのに、早速あの二人に掴まってしまう。

おいらって、なんて運が悪いんだろう。

「よお、今こいつと二人で、またあの女の子の小屋に行こうかって話してたんだ。お前も行くか？」

しかも、お前たちも考えてる事はおいらと同じか……いや、違う。

おいらは、女の子に『この小屋は日くつきの小屋ですよ』って教えてあげる為に行く。

そして、こいつらは、昨日と同じ目的で、女の子をからかったり嘲笑ったりしに行く。

そうに決まっている。

ああ、おいらにはつくづく運が無い。

こいつらと一緒にいったら、また女の子に嫌がらせして、女の子にもっと嫌われてしまう。

でも、おいらもついていかなければ、こいつらがあの子にとっても酷い仕打ちをするかも知れない。

そんな酷い目にあったら、女の子が可哀想だ。

でも、下手な止め方をすれば、今度はおいらがあの子の同類として、苛められる対象になってしまう。

結局、こいつらに付いていっても、何も出来ずにまた女の子に嫌われるのだろうか？

そんな事を心配したり思い悩んでいるうちに、またしてもあの小屋の前にきてしまった。

女の子は、昨日と同じ様に、全身泥まみれのまま畑作業を黙々と続けていた。

「なあ、お前達、どこからここへきたんだ？」

「いつ来たんだよ」

二人が口々に言う。

しかし、女の子は二人の問いかけを無視して、尚も頑なに畑作業を続けている。

「無視すんなよ！」

「いえよ！」

今度は二人が何を思ったのか、突然足元の石礫を掴んで、女の子に向かって投げつけた。

「痛い！」

石礫は女の子の足と背中に当たった。

さすがに石礫を投げられては、そのまま無視していただけないと女の子も立ち上がってこちらに向き直る。

「お前もやれよ」

おいらも促されるが、そんな事を出来る訳がない。

でも、ここで拒否したら、今度はおいらが苛められる。

半ば自棄になって、両目をつぶって投げた石礫は、不幸にも女の子のおでこの真ん中を直撃し、あの子のおでこから血が滲んできた。

ああ、最悪だ。

せっかくもう少し話をしようと思っていたのに、よりによって女の子の顔を傷つけてしまった。

涙を瞼に満たしながら、それでも尚必死に泣くのを堪え、刺すようなきつい視線でおいらを睨みつける女の子。

ああ、これで決定的に嫌われてしまった。

その時、女の子の異変を察したこの子の父ちゃんが、慌てて女の子に駆け寄る。

「あ！ やっぱり、家の父ちゃんが言ってた様に、お前の父ちゃん流刑者だ」

「ほんとだ。流刑者は悪い奴だって、家の父ちゃんも言ってた」

「父さまは悪くない！」

女の子が必死に抵抗する。

でも、女の子の父ちゃんの額には、流刑者の印である焼印が刻まれていた。

おいらも、父ちゃんから『流刑者は悪い奴だ』と聞かされている。

そして、『流刑者の家族も流刑者に協力した悪い奴らだ』とも言っていた。

おいらには、どうしてよいやら分からなかった。

『あんなに可愛い目をした子が、悪い事をする筈が無い』と思う反面、『人は見かけによらないな。父ちゃんの額の焼印が何よりの証拠だ』とも思った。

「流刑者はさっさと出てけ！」

「悪人はどこかへ消えちまえ！」

二人の罵声が飛び、立て続けに石礫が女の子に投げられる。

女の子の父ちゃんが、女の子を庇う様に抱え込み、その背後からバラバラと石礫が投げつけられる。

いつの間にか、おいらも目に涙を浮かべながら、女の子の父ちゃんに石礫を投げつけていた。

しばらくの間、夢中で石礫を投げているうちに、おいらの目から涙が消えていた。

悪いのは女の子の父ちゃんだ。

だったら、それを庇う女の子だって同罪じゃないか。
いつの間にか、おいらの心の中には冷たい氷の粒が一面に敷き詰められていた。

＊

またあの三人組がやって来た。
きっと、また昨日と同じ様に、私たちに酷い罵声を浴びせるつもりには違いない。
でも、昨日父さまが言った様に、相手にしないで無視しておこう。
酷い事を言われた分だけ、一生懸命に働けば、その分だけ後になって良い事が巡って来る
のだから。

私は三人組が近づいてくる気配を感じつつ、極力無関心を装った。
きっと、昨日の様に無視していれば、すぐに飽きてどこかへ行ってしまう筈。
「なあ、お前達、どこからここへきたんだ？」
「いつここへ来たんだよ」
三人組が口々に言う。

しかし、私は更に腰を深く屈めて、『あなた達の姿は見えないし、あなた達の声も聞こえません』とでも言う様に問いかけを無視して、目の作業に全神経を集中した。

「無視すんなよ！」

「いえよ！」

全く反応しない私に苛立ったのか、間を置かずに二つの石礫が私の足と背中を叩く。

「痛い！」

無視するつもりだったのに、突然の痛みに思わず反応してしまった。

これでは、三人組を面白がらせて、ますます調子に乗せるだけだ。

でも、今更になって後悔してもどうなるものでもない。

私は覚悟を決めて立ち上がり、三人組に向き直った瞬間、私の頭に強い衝撃が走った。

またしても石礫が飛んで来た。

石礫は私のおでこを直撃し、一瞬クラクラする衝撃とともに、患部を鈍い痛みと熱が襲った。

こんなに目立つ所に傷を作られたら、きっともうお嫁さんの貰い手もなくなってしまう。

私たちだけが、なぜこんなに酷い目にばかり遭うの？

無意識のうちに瞼に涙が溢れ、今にも零れ落ちそうになっている。

でも、三人組の前で泣いたら、私の負け。

私は唇に力を込めて真一文字に結び、絶対に三人組の前で涙だけは流すまいと、目の前の三人組を睨みつけながら必死に耐えた。

私たちは何も悪い事をしていないのに、度々このような屈辱を受けるのは耐えられない。

その時、三人組が相次いで、私にはとても堪えられない暴言を吐いた。

「あ！ やっぱり、家の父ちゃんが言ってた様に、お前の父ちゃん流刑者だ」

「ほんとだ。流刑者は悪い奴だって、家の父ちゃんも言ってた」

とうとう、三人組は父の額の焼印を発見してしまったのだ。

私の父さまは、間違えて無実の罪を被せられただけなのに！

父さまは何も悪くないのに！

「父さまは悪くない！」

私は我慢出来ずに、思わず反応してしまっていた。

私の父さまはとてもいい人。

私が尊敬する、とても素晴らしい人。

ずっと一緒にいるのだから、誰よりも私と母さまがよく知っている。

それなのに、それなのに、何も知らないあなた達が、父さまの事を悪く言うなんて、許せない。

父が私の元に駆け寄ってきて、『大丈夫か？』と私の顔を覗き込んで来た。

悲しみと憂いといったわりの気持ちがないまぜになった様な、複雑な父の表情が、父のやり切れない気持ちを表していた。

でも、父は三人組の理不尽極まりない行為には、何ら抵抗する意思を見せなかった。

「流刑者はさっさと出てけ！」

「悪人はどこかへ消えちまえ！」

三人組は更に調子に乗って、私に向かって立て続けに石礫を浴びせる。

「うずくまって」

父の声に、私は咄嗟にその場で膝を折って腰を屈め、両手で頭を覆った。

父が私に覆い被さる様にして守ってくれる中、三人組の投げる石礫が父の背中を打った。

父は、石礫の衝撃を全て自分の背中で受け止め、体を張って私を守ってくれた。

それが、今の父に出来る精一杯の抵抗だったのだろうか。

随分長い間、私は父の腕の中で石礫の嵐が行き過ぎるのを待ち続けた。

実際はほんの少しの間だったのかも知れないが、私と父にとっては永遠にも感じる長い間、余りに傷付きやすい無防備な体を石礫の雨に晒し続けていた。

やがて、三人組がどこかへ去ってしまった後も、しばらく父は私を腕の中に抱え込んだまま動けなかった。

父は決して痛みに負けて呻き声を上げたりはしなかったが、薄っぺらなボロボロの着物に隠された父の背中が、今頃大小様々な青あざに埋め尽くされているに違いない。

それでも、父は立ち上がる時に一瞬だけ『ウッ！』と痛みに絶えかねた声を漏らしたが、父が弱音らしき声を漏らしたのはたったその一度きりだった。

「父さま、昨日父さまが言った事は分かるけど、この仕打ちは余りにも酷過ぎます……まるで罪人みたいに石礫で打たれるなんて」

私は余りの悔しさと情けなさに耐え切れずに、思わず父に漏らしていた。

「申し訳ない。私が流刑者となってしまったばかりに、お前の顔にまで傷を付ける事になってしまって……」

確かに、おでこに傷をつけられた事はとてもショックだった。

一瞬、もうお嫁さんの貰い手もなくなるかもと落胆もした。

でも、私の顔に傷が付こうが付くまいが、父が流刑者だと言う事実が、既に私から人並みの女の幸せを奪っていた。

誰も好き好んで、流刑者の娘をお嫁にもらってくれる筈がない。

「私よりも、父さまこそあんなにたくさんの石礫を受けて、大丈夫ですか？」

「お前は自分が酷い傷を受けたのに、私の事を先に心配してくれるのだね。ありがとう。その気持ちだけで、だいぶ痛みが和らいだよ」

父は引きつった笑みをこぼした。

痛みが和らいだなんて、絶対に嘘だ。

「父さま。私たちは、なぜあのような仕打ちを受けても、黙って耐え続けなければならないのですか。このままでは、いつか、私たちは石礫で打ち殺されてしまう」

「私は、流刑者だ。私の額の焼印を見れば、誰もが私の事を流刑者だと分かってしまう。人は誰でも、罪を犯した悪い人と一緒に暮らしたいなんて思わないものなのだよ。幸いにも、ここは人里から離れていたから、何とか一年間留まって頑張る事が出来た。もちろん、お前や母さんがいたから頑張れたのだがね。しかし、私たちの存在が人里に知れてしまうと、またここを追われる事になってしまう。ましてや、あの三人の少年達に反抗して、間違っただけでも負わせてしまえば、まず間違いなくここを追われてしまう。私にはもうお金もない。母さんを今動かす訳にもいかない。今ここを動く訳にはいかないのだよ。お前の気持ちは痛い程分かる。私こそ、大切なお前を傷つけられた事に、憤りを感じない筈がない。しかし、幾らそれを理不尽に感じようが、今はこういう時代なのだ。ましてや、未だ大人の分別を求められる筈もない、あの少年達を咎めても仕方がない。これらは全て、私の不徳の致す所なのだ」

私はまたしても父を苦しめる様な事を言ってしまった。

私よりも、何十倍も何百倍も苦しいのは父自身だって、昨日も私は思い知らされたばかりなのに……。

「ごめんなさい、父さま。私、また父さまを苦しめる様な事を言ってしまいました」

私の心が痛がって、涙がこぼれた。

あの三人組に痛めつけられたって、必死に頑張って耐えたのに、今はあの時よりも何倍も痛い。

もう、これ以上一瞬でも堪えられなくなって、私は父にもたれかかる様にして泣いた。

父は何も言わなかった。

何も言わずに私を受け止めてくれて、埃にまみれた私の髪を優しく撫で付けてくれた。

小さい頃に、よく甘えて父にしがみついていた記憶が蘇った。

あの時は幸せだった。

何一つ不自由もなく、自分の回りの何もかもが、明るく輝いていた。

ああ、あの頃に帰りたい。

でも、それはない物ねだりの、決して叶わぬ夢。

私はいきなり過酷な現実に戻されたが、いつまでも夢幻に頼って縋っていても、現実は何も変わらない。

今は、過酷な現実を直視して、一歩ずつ前に進むだけ。

しばらくして、私の吐き出した感情も一心地ついて、ようやく気分が落ち着いてきた頃になってから、父がそっと語りかける。

「きっと、今までと同じ様に、これからも辛い事や、苦しい事、悔しい事があるだろう。でも、そういった色々な障害を、せめて私たちは笑って乗り越えていこう。笑いには、凝り固まった人の心を癒す、不思議な力があるのだよ。いつかは、あの三人の少年の凝り固まった心も、私たちが笑いを分けてあげる事で、少しずつ癒していこうじゃないか。お前の笑顔は、本当に可愛いのだから、笑って見せてくれないか。それが明日への力になる」

『可愛い』といわれて私は照れてしまい、恥ずかしげにはにかんだ。

親の欲目という部分もあるのだろう。

でも、昨日『汚い』と罵倒されたばかりだから、私はとても嬉しかった。

仮にその言葉が本心からではなくても、『可愛い』といわれて良い気分のしない女の子はいないと思う。

それにしても、この父の強い信念はどこから来るのだろう。

どの様に罵倒されても、石礫で酷く打たれても、恨み言や愚痴の一つも漏らさずに、目の前に立ち足る障害を乗り越えようとしている。

しかも、笑いの力で相手の心を癒していこうというのだ。

私は、これまでの体験の中から、『この世の中は綺麗事だけでは通用しない』事を学んだ。

綺麗事では通用しない事態に巻き込まれたから、今の私たちがいるのだ。

父の言う事は素晴らしい事だし、人として尊敬できるものだけど、私自身はそれ程出来た人間ではない。

怒るし、泣くし、恨み言もいう。

だから、父がそこまで言い切れる理由がわからなかった。

きっと、私の思いもよらない様々な体験を積み重ねてきたのだろう。

私は、父がなぜそう思えるのか、その理由を知りたいと思った。

＊

これまで病床に臥せっていた母が、今朝、息を引き取った。

昨晚までは意識があったのに、今朝気付いた時には、もう二度と目を覚まさないで。

私も、父も気がつかないうちに息を引き取っていたので、きっと眠る様に亡くなったのだろう。

心地よさそうな、安らかな死に顔だった。

父が流刑に科せられてから、母は慣れない苦労の連続だったのだから、死に際だけでも安

らかだったのなら、せめてもの救いだった。

父が小屋の脇に穴を掘り、そこに母の衰弱した遺体を埋葬した。

ちゃんとしたお葬式に出すお金なんてなかったし、そのままにしておく訳にも行かなかったので、こうするしかなかった。

私たちは、母が極楽浄土で幸せに暮らせる事を願いつつ、母の冥福を祈った。

いくら母が亡くなったといっても、私たちには静かに感傷に浸ったり、母の死を悼んだり悲しんだりしている暇はなかった。

悲しい事ではあるが、今日も仕事をしなければ、今度はいつ私たちが母の立場になるか分からないのだ。

私は、母の死を悲しむ気持ちを心の奥底に封印して、今日の畑作業に取り掛かった。

何故かここ数日、例の三人組は姿を見せなかった。

今日来るかもしれない。

もうすぐやって来るかもしれない。

今度はもっと酷い仕打ちを受けるかもしれない。

そんな事ばかりが気になっていたから、余計な邪魔者に惑わされず仕事に打ち込む……という風にもいかず、常に周辺の微かな変化に気を取られていた。

この世の中とはなんとも皮肉なもので、せっかくあの三人組に惑わされずに済んだと言うのに、今度は三人組の訪問に怯え、常にあの三人組に付きまとわれている様な錯覚に襲われる。

そのうちに、今度は本物の三人組が再びやってきて、私たちは更に酷い目にあうのだ。

このような被害妄想に常に囚われていたから、気の休まる暇がない。

そして、それが自分にとって良い事であっても、悪い事であっても、心の中で強く念じられた思いは、えてして現実となってしまうものだ。

久しぶりにまたあの三人組の姿を見つけた時、私は半ば『なぜそんな執拗に付きまとうの？』と自分自身に課された宿命を呪い、反面『やはり来た』と諦めている自分がいた。

三人組は口々に私を、そして父を罵倒し、石礫を投げつけた。

父はまた私を庇って、全ての仕打ちを受け止めてくれた。

でも、石礫を一度受ける度に父が少しずつ弱っていく様で、父の体調が気遣われた。

もともと父は簡単に弱音を吐く人ではなかったし、『酷い仕打ちも笑顔で乗り越えてゆこう』という、私には理解不能な高尚な志しと強い精神力の持ち主だ。

自分の体調が多少悪くなっても、私にはその気配すら見せないだろう。

でも、そうやって父が無理に無理を重ねれば、やがて父も母の後を追ってしまうかもしれないのだ。

それだけは嫌。

母を病で失ったばかりだというのに、今度は父までもを失ってしまうなんて、私にはとても絶えられない。

父までも失ってしまったら、私は一体何を支えにして生きていけばいいの？

私は父に背中 of 具合を聞いたが、父は『大丈夫だ』というばかりだ。

三人組は、それから一週間立て続けにやってきて、罵声と石礫で私たちを痛めつけた。

何故か七日後には二人しか来なかったが、二人だろうが三人だろうが、私たちが受けた仕打ちの重さに変わりはない。

決して口には出さないけれども、石礫を背中に受ける度に父の体調が悪化し、徐々に衰弱している様に見えた。

私は父に仕事を休む様進めたが、父は頑なに拒否した。

『自分が流刑者になってしまった為に、私たちに様々な悲劇が襲い掛かるのだ』という自責の念もあり、また『私が石礫に打たれない様に自分が守らなくてはならない』という責任感に突き動かされていたのだろう。

七日目の朝には、父の体はかなり高い熱を帯びている事を知ったが、父の執念の気迫に気圧されて、仕事に出る父を止める事は出来なかった。

七日目にひとしきり石礫で打たれた後、父はそのまま倒れてしまった。

私は慌てて父を何とか小屋まで連れ帰り、背中 of 具合を見て唖然とした。

一週間にも渡って立て続けに強い衝撃を受けた為に、背中 of 皮膚が膿んで腐りかけていたのだ。

余りにおぞましいその有り様に、私は思わず目を背けてしまった。

きっと父の高熱の原因はこれに違いない。

既に父は虫の息で、殆ど動けなくなっていた。

父だけは何とか助かってもらいたかったが、医者に診てもらうお金はないし、手当てしようにもどうやって手当てしたら良いのか分からない。

結局、私には何も出来なかった。

私は自分の不甲斐なさ、至らなさ、無知さを嘆きつつ、手当てなど出来ないながらも、夜を徹して父の様子を見守り続けた。

父は、熱に浮かされながら、夢と現の境目を行ったり着たりしながら、次の日の夜明けを待たずに息を引き取った。

私の中の、『どんなに過酷な試練にも耐えていこう』という思いを支えていたものが、ぽっきりと折れて崩れ去った。

父の死に気付いた瞬間から、自分自身も失われたように、何事も手につかずにただ呆然としていた。

心が真っ白になるとはこの事を言うのだろうか。

ただただ、父が亡くなったという現実を受け入れられずに、思考停止状態に陥っていた。

私は、父の亡骸の傍らに呆然と座り込んだまま、その日を終えた。

いつの間にか眠り込んでしまっていた私は、まだこの様な悲劇に見舞われる前の、何もかもが幸せ色に染まっていた頃の、父と母と共にいる夢を見た。

私は、記憶にある限りの父の言葉、母の言葉を思い浮かべ、父との思い出、母との思い出の中に浸っていた。

その中で、『父は、自分の身を犠牲にしてまで、父なりのやり方で私を守ってくれた』という事実に思い至った。

せっかく父が守ってくれたのに、私がここでめげてしまっては申し訳がない。

父は私が受ける筈の仕打ちを身代わりに引き受け、私の盾となってくれたのだ。

そんな父の思いを無にしない為にも、私は精一杯生きなくてはならない。

私は母のお墓の隣に穴を掘り、父の遺体を埋葬した。

これで、もう私には何も頼るものがなくなった。

自分に降りかかる何もかもを、私一人で受け止めていかななくてはならない。

本来ならば、このまま畑作業をしなくてはならないのだが、今日ばかりは悲しみに泣き暮れる以外に、何も手に付きそうもなかった。

父さまにたくさん守ってもらった分だけ、私は諦めずに今を生き抜きます。

でも、今日一日くらいは、父さまを失った悲しみに泣いても、いいでしょう？

＊

なんてこった。

おいらの父ちゃんが村の禁忌を破って、こっそり山で猪を獲った事が、村の連中にばれてしまった。

おいらの弟の体の具合がこの所ずっと悪くて、父ちゃんは弟に滋養のある物を食べさせて、少しでも早く病気を治してやろうとしただけだ。

それなのに、村の連中はしつこく父ちゃんを責め立てる。

「なんて事をしたんだ。ただでさえ山の四つ足を殺めるのは村の禁忌なのに、よりによって山神様の化身の猪を食べてしまうなんて」

「山神様が怒って、飢饉になったらどうしてくれるんだ」

村人達は口々に父ちゃんを激しく叱責した。

父ちゃんは『すまん』『すまん』と、何度も地面に額を擦りつけては、村人達に謝った。

でも、世の中には謝って許される事と、謝っても許されない事がある。

「あんたは息子を助けたい一心だったかも知れないが、あんたの息子を一人助ける為に、飢饉が襲って村人全員を飢え死にさせても良いってのか？」

その言葉が全てだった。

この村を含めた山の麓付近一帯は、遥か昔から山に宿っているといわれる山神様に守られている。

だからこそ、里の方で飢饉が起ころうとも、この村では殆どその影響を受けないで来たのだ。

もともと余り豊かな土地ではないが、それでも山神様のご加護によって、飢えずに人が生きていける程度の食べ物は手に入った。

でも、村の禁忌を破って、山神様の怒りを買ってしまえば、この先どの様な仕打ちを受け

るか分からない。

山神様がどの様な仕打ちを課すのかを恐れる余り、村人の怒りの矛先は自然と父ちゃんや、おいら達家族に向く。

その日、父ちゃんは村人達に散々殴りつけられ、蹴り飛ばされた。

全身が醜く腫れ上がって、ほんの少しでも体が動かせない程、酷く痛がっていた。

次の日から、村人たちのおいら達に対する様々な嫌がらせが始まった。

父ちゃんは全身の痛みが酷い様で、仕事も出来ずに寝込んだままだったし、弟も、せっかく父ちゃんが手に入れた猪で作った猪汁を食べても、一向に体調はよくならなかった。

母ちゃんは父ちゃんと弟の看病に加えて、村人たちの執拗な嫌がらせを一人で受けて、とっても辛そうだった。

そして、おいらは村の子供達から苛められるようになった。

以前は三人組としてよく行動を共にしたあの二人も、掌を翻すように態度を一変させて、きつい言葉でおいらを罵倒した。

「村の禁忌を破ったお前の父ちゃんは罪人だ。罪人の父ちゃんを庇うお前も、罪人だ。罪人はさっさとこの村から出てけ！」

おいらは棒で殴られ、足で蹴飛ばされた。

おいらは地面に寝転んで体を丸めて、この暴力の嵐が過ぎ去るのをひたすら待ち続けるしかなかった。

頭を両手で抱えて痛みを耐えているおいらの頭の中に、いつかおいらも似たような言葉を吐き、似たような仕打ちをした過去がある事に思い至った。

そうだ。

あの、みすばらしい小屋に住む汚らしい女の子、目がクリッと丸くてちょっと可愛い女の子と、流刑者の父ちゃんに向かって、おいらは石礫を投げ、酷い言葉を吐いた。

あの時の女の子は、今のおいらと同じだ。

おいらの父ちゃんは流刑者ではないけど、村の禁忌を知っていながら破った。

村人たちに責められるのも仕方ない。

でも、父ちゃんは自分が猪を腹一杯食う為に猪狩りをしたのではなく、具合の悪い弟の病が早く良くなるように、その為に滋養のある食べ物が必要だったただけだ。

家族のおいらが見ても『父ちゃんは悪くない！』とまではいえないけど、どうしてもない事情があった事をもう少し分かって欲しい。

多少は悪いかもしれないけど、そんなに悪し様に言われるほど悪くはない。

あの女の子も、『父ちゃんは悪くない！』といていたけど、きっと止むに止まれぬ事情があって、仕方なく罪を犯したのであって、しかも流刑で罪の償いをした後になっても、執拗に責め立てられる事に我慢できなかったのだろう。

きっと、今のおいらと同じ様に、とても悔しくて、辛かったのだろう。

村の子供達はとうに立ち去って、おいらはその場に一人取り残されてからも、その場で蹲って泣いた。

村の子供達が憎らしくて、悔しくて泣いた。

同時に、あの女の子にとっても酷い事をした、とても悪い事をしたと後悔した。

村の子供達がおいらにした事と同じ仕打ちを、おいらはあの可愛い女の子にしていた事に気付いて、自分が憎らしくて、悔しくて泣いた。

泣き疲れて、朦朧としたまま家に戻ると、父ちゃんと弟の床の脇で、母ちゃんが一人泣き崩れていた。

また村人達が『早くこの村を出てけ。疫病神』と責め立て、家の中にまで入り込んで父ちゃんや母ちゃん、そして弟にまで手を出したのだという。

「おいらが復讐してやる」

おいらの怒りは頂点に達し、拳を握り締めて踵を返した。

「そんな事したら、あんたまで殺されてしまうよ」

慌てておいらを止める母ちゃんの顔は、殴られた痕が痛々しく腫れ上がっていた。

次の日のまだ深夜のうちに、父ちゃんと弟が相次いで息を引き取った。

本来なら村の共同墓地に埋葬したいのだが、今おいら達が置かれた状況ではそれも叶わない。

おいらは母ちゃんと相談して、まだ夜も明け切らぬうちから、家の裏庭に穴を掘って二人の遺体を埋めた。

そして、村人に気付かれないうちに村を後にする事にした。

このままでは、遠からずおいら達も父ちゃん達の後を追う羽目になるからだ。

「母ちゃんは先に逃げろ。おいらは村の連中に復讐してから、後を追う」

母ちゃんは止めたが、おいらは母ちゃんの手を振り解いて、別れ際にこういった。

「幾らなんでもこれでは父ちゃんが浮かばれない。絶対に後を追うから、母ちゃんも無事に逃げろよ」

おいらはもう後ろを振り返らなかった。

その後、母ちゃんがどうなったのか、おいらは知らない。

とにかく、散々酷い目にあわせた村人達に一矢報いたい。

そうでなくては、同じ逃げるにしても悔しいし、父ちゃんの無念を思うと余りに可哀想だ。弟なんて、ただ病に臥せていただけなのに殴り殺されて、これは真っ当な人のする行為ではない。

そういう非道の振る舞いをした連中に、罪の報いを受けさせたかった。

具体的にどうするという方法はない。

でも、村の様子を陰から窺いながら、そのうちに何か良い方法を思いつくだろうと考えていた矢先に、村の子供達に見つかってしまった。

「まだ村にいたのか」

「さっさと出てけ。罪人の子供」

おいらは再び酷く痛めつけられた。

それこそ日が暮れるまで、執拗に殴られ、蹴られ続けた。

子供達が立ち去ってからも、しばらく身動きが取れなかった。

おいらはそこら中が痛みに呻く体を引きずるようにして、『せめて復讐してやる』という最後の望みも絶たれた無念に、唇をかみ締めた。

このままでは次には殺される。

そんな不吉な予感が頭をもたげ、悔しいけれどこのまま村を去り、母ちゃんの後を追う事にした。

母ちゃんは今どこにいるかなんてわからないし、おいら自身がどこにいるのかも良く分からなかったが、おぼろげな意識の中で『母ちゃんとの約束だけは守らなくては……』と思った。

朦朧とする意識の中で、ぼんやりと見える目の前の道を、一歩ずつ、その先に母ちゃんが待っている事だけを信じて、痛む足を引きずった。

母ちゃんごめん。

母ちゃんの言うように、一緒に逃げればよかったよ。

おいらの頬に、いつの間にか、悔しさと後悔の念が涙に変わって滴り落ちていた。

＊

私は散々泣いて、泣き疲れて眠ってしまっていた。

でも、父さまは、泣いてばかりいる私を見てもきっと寂しがらるだろう、きっと喜ばないだろうと思い直して、父さまを失った悲しみを強引に振り払って、これまでの様に畑作業を始めた。

父さまは『お前の笑顔は、本当に可愛いのだから、笑って見せてくれないか』と言ってくれた。

それは親の欲目でも、ただのお世辞でも、私はとっても嬉しかった。

だから、そんな父の喜ぶ顔をいつでも見せていたいから、無理にでも笑っていなくてはいけないのだ。

実際には、無理に笑うなんて出来ないし、今は悲しくて、寂しくて、とても笑える気分ではない。

でも、せめて、努めて悲しみを振り払って、悲しい分だけ仕事に打ち込もう。

そうすれば、いつかはきっとこの悲しみも落ち着いて冷静に受け止められるようになって、そのうち自然と笑顔も零れる様になるかも知れない。

そうすれば、今は極楽浄土で私の事を見守ってくれている父さまが、また私の笑顔を見て喜んでくれる。

きっと。

私一人の生活は、働き手が一人になってしまった分、作業の進捗も極端に悪くなった。

でも、最初にここに来た時に比べれば、父と母の分の食べ物が必要なくなったのだから、こなさなくてはならない仕事量自体も減る。

当面は父と母の分まで含めた量の作物を栽培していたから、その分だけ食べ物に余裕も出来た。

それに、これは父に対しては申し訳ないのだが、流刑者の娘という烙印からも開放された。その代わりに、最も頼りにし、また尊敬する父を失うと言う、余りに大き過ぎる代償を求められたけれど。

私は何とか悲しみを堪えつつ、何日か一人での仕事、たった一人の生活を黙々と続けた。幸いにも、あれ以来三人組はぱったりと姿をみせなくなった。

すぐ傍に誰もいないというのはとても寂しかったが、またこの前のようにあの三人組の事を気にし過ぎると、その思いが返って三人組を引き寄せてしまう。

この前はそれが父を失うきっかけになったのだから、私までも父の期待を裏切ってあいつらの餌食になる訳には行かない。

私は、あの三人組の事を、それ以降は考えない様にした。

そして、ただひたすら、日々の作業に没頭した。

そんな日々が数日続いた次の朝、畑のすぐ近くの道で、人が行き倒れているのを発見した。私は慌てて駆け寄り、うつ伏せに倒れているその人に声をかけながら仰向けにした。

「あ！」

私は思わず声を上げてしまった。

あの三人組のうちの一人だ。

今でもはっきり顔を覚えている。

私のおでこを石礫で傷つけた、あの嫌な奴だ。

私の事を『汚い！』と悪し様に言った奴。

私はあの時の悔しさを思い出して、そのまま放置してしまおうかと思ったが、男の子の様子がおかしいのが気になった。

酷く殴られた様で、全身のそこかしこに腫れ上がったり、傷ついている箇所がある。

私は最初『あんなに私たちを酷い目に合わせて、拳句に父さままで奪ってしまったのだから、その報いを受けたのよ。いい気味』と思ったが、慌ててその考えを取り消した。

きっと、父さまだったら決してそんな事は言わないし、憎い相手でも傷ついた時には労わって上げるのだらうと思ったからだ。

第一、困っている人を放って置くだけでも、その罪は困らせた人と同じくらい大きいのだし、私がそんな女では父さまも悲しむだろう。

それに、私だけは、この男の子と同類の『嫌な女』にはなりたくない。

私は、自分より背丈のある男の子を苦勞して抱えて小屋へ運び、小屋の使い込まれた粗末な板の間に横たえた。

それから、昼間は仕事の合間合間に様子を見つつ、夜は食事を与えたりしながら、男の子の怪我が回復する様に一生懸命お世話をした。

それから一週間程が経って、男の子の体調は大分良くなってきた。

今では一人でご飯を食べられる様にもなったし、普通に話も出来る様になった。

まだ体の節々に痛みが残るようだが、それもそう遠くないうちに回復するだろう。

私は、男の子が普通に話せる様になってから、色々な話をした。

男の子がなぜ私たちを酷く苛めたのか。

なぜ酷い傷を負って倒れていたのか。

そういう話を聞いた。

そして、私も男の子に苛められて悔しかった事。

最初は父さまや母さま以外の人とお話したいと思ったけど、あなた達だけは大嫌いと思った事。

父さまを殺されて三人組を恨んだ事。

でも、父さまだったら、傷ついた男の子をどうするかを考えて助けた事。

そういう話を話した。

男の子は、激しく泣いて私に謝罪し、そして感謝してくれた。

その時、私は、少し嬉しかった。

男の子が行き倒れているのを、そのまま放置しないでよかったと思った。

「瞳がクリッと丸くて、可愛いね」

男の子は言ってくれた。

とても嬉しかった。

父さまに言われた時も嬉しかったが、かつて苛められた子に言われるのだから、それは親の欲目とか鼻眞目とかではなく、男の子が本当にそう思ってくれている……そう思うと、私はとても嬉しかった。

しかも、始めて出会った時からそう思ってくれていて、でも他の二人の手前口に出せなかったなんて……その時に言ってくれれば、もっと仲良く出来たのに。

でも、色々な話をしているうちに、実は男の子がそれ程悪い子ではなく、むしろ私とも結構気の合う子だと言う事が分かった。

ただ、男の子自身ではどうにもならない世間のしがらみとか、敢えて抵抗すれば自分の身に災厄が降りかかるかも知れない状況のなかで、何となく周囲に流されて私たちに危害を加えたのだという事だ。

男の子は酷い事をしたと繰り返し謝ってくれたが、私にはもうそれだけで十分だった。

それからまた数日が経った頃には、男の子の具合はすっかり良くなって、多少痣の痕跡が残るくらいにまで回復していた。

「母ちゃんと離れ離れになってしまって、母ちゃんがおいらの事を待ってるかも知れないから、探しに行かなくてはいけないんだ」

男の子は言った。

「おいらはこれから、母ちゃんを探しに行ってくる。おいら達には他に行く所がないから、母ちゃんを見つけたらここに帰ってくる。おいらはお前の事が好きだから、母ちゃんを連れ戻したら、いずれおいら達夫婦（めおと）になって、ずっと一緒に暮らそう。いいだろう？」

「……うん」

私はそういうのが精一杯だった。

流刑者の娘として酷い仕打ちを受けて、更におでこに傷までつけられて、お嫁に貰ってくれる人なんていないと諦めていたのに、まさかこの男の子のお嫁さんになるなんて思いもなかった。

でも、話をしてみたらいい人だし、気も合うみたいだし、この先ずっと一人寂しく暮らすのかと不安だったから、とても心強かった。

以前、男の子に対して抱いていた嫌いと言う感情はなくなったにしても、まだ好きだとまではいえなかった。

最初の印象が悪かっただけに『意外といい人』くらいが精々だ。

でも、これから一緒に暮らすのなら、これから少しずつ好きになっていけばいい。

まだ時間は幾らでもあるのだから。

＊

散々村の子供達に殴られて、蹴飛ばされて、行き倒れたおいらを助けてくれたのは、以前おいら達が散々苛めた、あのみすぼらしい小屋に住む女の子だった。

おいら達は女の子にも、その父ちゃんにもとても酷い目にあわせたのに、女の子は献身的に看病してくれたのだ。

おいらは自分が情けなくて、女の子にこれまでの色々な暴力や暴言を泣いて詫びた。

女の子はおいらの抱えた様々な事情を理解して、そして許してくれた。

確かに着物は相変わらずボロボロで薄汚れていたし、顔にも土埃がついている様な、お世辞にも綺麗とは言えない格好だったけど、おいらにとって女の子はどんなに着飾ったお姫様よりも光り輝いて見えた。

「瞳がクリッと丸くて、可愛いね」

おいらが始めて女の子に出会った時に思って、それからずっといえなかった一言をやっというと、女の子は恥ずかしがっていたけどとても喜んでくれた。

女の子の父ちゃん以外で女の子の事を『可愛い』と言ったのはおいらが始めてだって聞いて、ちょっと驚いた。

女の子は『嘘でも嬉しい』とはにかんでいたが、おいらは『なんでそんな嘘を言わなくちゃならないの?』とムキになって、更に彼女を笑わせたりした。

その時、おいらは本当にこの女の子が好きなんだって思った。

もっと早くこうして話をしていればよかったのにと後悔したが、幸いにもおいら達にはまだ幾らでも時間はある。

女の子を苛めて嫌われた分は、これから時間をかけて償っていけばいい。

それから数日がたって、女の子のお陰で体調がほぼ回復したおいらは、一人で先に逃げてもらった母ちゃんの事が気になっていたから、女の子にこう切り出した。

「母ちゃんと離れ離れになってしまって、母ちゃんがおいらの事を待ってるかも知れない

から、探しに行かなくてはいけないんだ」

女の子は心配してくれた。

おいらの受けた傷はほぼ治っていたけど、まだ万全と言う訳ではなかったから、また村人に見つかって酷い目にあうのではないかと気遣ってくれた。

でも、母ちゃんとの約束があったし、おいらにとっては母ちゃんの事も気がかりだった。

「おいらはこれから、母ちゃんを探しに行ってくる。おいら達には他に行く所がないから、母ちゃんを見つけたらここに帰ってくる。おいらはお前の事が好きだから、母ちゃんを連れ戻したら、いずれおいら達夫婦になって、ずっと一緒に暮らそう。いいだろう？」

おいらは思い切って、女の子にいつてみた。

この数日間、女の子と色々な事を話して、女の子もおいらの事をそれ程嫌いではなくなっていると思ったし、お互いに結構気が合うと思ったから、おいらの気持ちを正直に言ってみたのだ。

それに、もし女の子が良いと言ってくれたら、おいらにも帰る所が出来る。

待っていてくれる人が出来る。

そうすれば、多少酷い目にあっても、絶対ここに戻ってくるという強い思いが生まれる。

「……うん」

女の子は恥ずかしがって俯いたままだったが、確かに『うん』とおいらの申し出を受け入れる意思を示してくれた。

「やった！」

思わずおいらは女の子を抱きしめてしまい、女の子を驚かせてしまったが、少しして女の子もおずおずとおいらの背中に手を回してきて、しばらくお互いの温もりを感じあっていた。

それからおいらは『絶対に帰ってくるから』とだけ言葉を残して、女の子の小屋を後にした。

それから一週間程、おいらは村には直接近づかないようにしつつ、村の周辺で人がしばらく留まっていられそうな所を探して回った。

しかし、母ちゃんらしき人は見当たらなかった。

母ちゃんを探しに行く前から、『女の子を余り待たせる訳にもいかないから、時間を区切って探そう』と決めていたから、おいらは母ちゃんの搜索を諦めて、女の子の元に帰る事にした。

後は、母ちゃんが無事にどこかで生き延びている事を願うだけだ。

お互いに生きていれば、またどこかで出会う事もあるだろう。

おいらは夜陰に乗じて村に忍び込み、今は空家となったおいらの家を久々に訪れた。

これから女の子の小屋で生活するのなら、生活必需品が不足している小屋に、何かしら役に立つ物を持って帰った方が、女の子にも喜ばれると思ったからだ。

おいらは、納屋に仕舞ってあった藁で編んだ大きな袋を思い出して、家の中にある生活必需品を思いつく限り片っ端から藁袋に詰め込んだ。

藁袋二袋分にもなった荷物を、今度は紐で結わえて背中に固定して、深夜の闇の中を女の子の小屋へ急いだ。

夜明け前には、村人にも見つからずに女の子の小屋へ辿り着いた。

女の子はまだ眠りについていて、おいらが藁袋の中身を開いている間に、彼女を起こしてしまっただけだ。

おいらは思わず彼女を抱きしめてしまった。

彼女はおいらが出かける前とは違って、今度はすぐにおいらの背中に手を回して、おいらと同じ様にきつく抱きしめてくれた。

「あれから一週間も経つから、どうしているかと心配していたの。ちゃんと無事に帰ってきてくれて良かった」

涙を零しながらそういつてくれた。

彼女にとっては、最愛の父ちゃんと母ちゃんを相次いで亡くして、その上においらまで帰ってこないのではと気が気ではなかった様だ。

それから『母ちゃんは見つからなかった』と報告すると同情してくれた。

「でも、おいら、それ程気落ちしていないよ。母ちゃんだっておいらだって、生きてさえいればいずれきっと会えるさ。それに、おいらにはここに守るべき人がいるし、それ以上を望むのは欲張りと言うものだよ」

それから、是非とも彼女に渡したいと思って、わざわざおいらの家に忍び込んで持ってきた物を手渡した。

「これ、おいらの母ちゃんが着てた着物だけど、使うといいよ。畑の前の小道をもう少し山の方へ上がると小さな滝があるから、そこで体を綺麗にしてから着るといい。今は母ちゃんのお古しか上げられないけど、いつか綺麗な花模様の着物を買って上げられる様に頑張るよ」

「ありがとう。今日早速着てみる」

彼女は着物を胸の所に当てて涙を流していた。

おいらも以前『汚い!』などと言ってしまったから、自分の身なりを相当気にしていたのだろう。

これで彼女が少しでも喜んでくれて、そして母ちゃんの少し地味な着物ではあるけど、ちゃんと洗った綺麗な着物を着れば、きっともっと綺麗で可愛い女の子に違いない。

おいらは今から、すっかり身綺麗になった彼女の姿を想像すると、ワクワクしていても立ってもいられなくなった。

*

耳元で何かゴソゴソ動いていると気になって起きてみたら、久しぶりに男の子が戻ってきていた。

彼は出かける前と同じ様に私をきつく抱きしめてくれた。

私も彼が帰ってきてくれた嬉しさの余り、反射的にきつく抱きしめる。

彼が出かける前はそれ程でもなかったのに、帰りを待っているこの一週間は心配で心配で気が気ではなかった。

『また村人に掴まってないかしら』とか、『危険な獣に襲われたり、崖から落ちたりしてないかしら』とか、『私が好きというのは口から出任せで、本当はどこかへいったまま帰って来ないのではないかしら』と言った様々な心配事が頭をもたげては消えていった。

だからこそ、最初の言葉通りに私の元に帰って来てくれた事がとても嬉しかった。

「あれから一週間も経つから、どうしているかと心配していたの。ちゃんと無事に帰ってきてくれて良かった」

嬉しさの余り、思わず涙を流してしまったくらいだ。

人の心とは不思議なもので、会えない時ほど余計に相手の事を思って恋焦がれてしまうものだ。

今の私が、恋焦がれた女そのものなのだろう。

つい一週間前には『意外といい人かも』と思って、それ以前は『嫌な奴』だったのだから、その変わり様は『女心と秋の空』と言う言葉そのものだ。

でも、私にとっては大切な人が相次いで目の前から立ち去ってしまっていたから、私の元に帰ってきてくれたというだけで、あれだけ心配した思いは全て報われた、彼の『私が好きだ』と言う言葉に嘘はなかったと安心できる。

そして、私にとっても今や彼はかけがえのない人になっている。

会えなかったこの一週間が、そして約束通り帰ってきてくれたという事実が、私の彼に対する思いを急速に変えていったのだろう。

彼の母さまが見つからなかったのは残念だけど、彼がいうように、母さまもきっとどこかで生きている筈。

「でも、おいら、それ程気落ちしていないよ。母ちゃんだっておいらだって、生きてさえいればいずれきっと会えるさ。それに、おいらにはここを守るべき人がいるし、それ以上を望むのは欲張りと言うものだよ」

彼は私の事を守るべき人といってくれている。

私の元からは何もなくなってしまって、途方に暮れていた矢先に、私の元に頼りになる素敵な人が現れてくれた。

私を守ってくれる人が。

「これ、おいらの母ちゃんが着てた着物だけど、使うといいよ。畑の前の小道をもう少し山の方へ上がると小さな滝があるから、そこで体を綺麗にしてから着るといい。今は母ちゃんのお古しか上げられないけど、いつか綺麗な花模様の着物を買って上げられる様に頑張るよ」

きっと彼は、私の事を悪し様に罵倒した事をまだ後悔しているのだろう。

彼のくれた着物は確かに母さまのお古かもしれないけど、私の事を気遣ってくれる彼の心遣いが嬉しかった。

その気持ちは、私にとっては綺麗な花柄の着物千着よりも価値のあるものだ。

「ありがとう。今日早速着てみる」

今日は本当によく涙を流してしまう。

嬉しい事の連続で、こんなに良い事ばかり立て続けに起こって大丈夫なのかしらと、心配にもなってしまう。

でも、今までがとても酷すぎたの。

少くくは良い思ひもしないと、生きる事が嫌になってしまう。

私はある程度日が高くなってきた頃に、仕事を彼に託して、彼のいう小さな滝へ向かった。

その滝は本当に大き過ぎず小さ過ぎず、人が滝の下に立って全身を洗い流すにはちょうど良い高さ水量だった。

こんな所に滝があるなんて知らなかった。

私は古い着物を久しぶりに脱ぎ捨てて、生まれたままの姿になって滝の中に足を踏み入れた。

こんなに日差しの照りつける表で裸になるのは少し恥ずかしかったが、山の中の小さな滝では別に人に見られる心配もないと、少々大胆な気分にもなった。

とうとうと流れ落ちる滝の水を頭から被りながら、全身にこびりついた泥や埃や、この土地に来てから自分が受けてきた様々な嫌な記憶、それに自分の宿命を恨んで抱いた様々な嫌な感情を、全て滝の水と共に手ぬぐいで洗い流した。

滝の水は少し冷たかったが、それが返って身を引き締まらせてくれた。

久々に水を浴びた心地よさで、毎日とはいかないまでも、これからも度々滝の水を浴びに来ようと決めた。

私は滝を出て、絞った手ぬぐいで全身の水飛沫をざっとふき取り、それから生まれたままの体を日の光にしばらく当てて乾かした。

今まで薄汚れていた手足の肌が艶やかな小麦色に染まり、またこれまで着物に隠されていた部分は透き通る様な白い肌と、これまでの運命の変転を表す極端なコントラストに覆われていたが、そんな事も全て隠してしまう程眩しい日の光に反射されて、全身がキラキラ光っている様でとても嬉しかった。

きっと彼も『綺麗だ』って言ってくれる。

私は密かにそう期待しながら、彼のくれた着物に袖を通して小屋に戻った。

「凄い。どこかのやんちゃんお姫様みたいに綺麗だよ」

彼は最初呆気にとられた様だったけど、顔をくしゃくしゃにして喜んでくれた。

『やんちゃん』というのは、畑仕事で毎日日差しを浴びた為に、肌が焼けて小麦色になっていたかららしい。

私自身は少し複雑な心境だったが、でも『お姫様みたい』とまで喜んでくれたのは嬉しかった。

それからは、彼に畑仕事は一切しないようにきつく言い渡されてしまった。

せっかく綺麗になったのに、畑仕事でまた汚れてはもったいないと言うのだ。

彼がそこまで言ってくれるのは嬉しい反面、彼に仕事を全て押し付ける様になってしまったのが心苦しかった。

でも、今日一日くらいならいいだろう。

私はその日を、彼が自分の家から持ち込んだ色々な物の片付けをして過ごした。

それから、今朝まで着ていた着物も一応汚れを洗い流して使う事にした。

別に畑仕事ならボロボロの着物でも構わないのだし、彼に貰った綺麗な着物はなるべく長持ちさせたかったからだ。

「おいらが持ってきた着物だって二着あるんだから、そこまでする必要ないと思うよ」

そう彼はいうが、この先いつになったら着物が買えるようになるのかなんて分からないし、今後何が起こっても耐えられるように、節約出来る所は節約した方がいい。

「なんか俺の母ちゃんみたいなことを言うね。でも、早くそういう心配しなくても済む様に、綺麗な花柄の着物だって何着でも買える様に、おいらもっと頑張るよ」

彼がそうしてくれるのは素直に嬉しかった。

実際に着物が買えるかどうかなんて二の次だが、でも、いつかそういう日が来ればいいと思った。

今日は久々に一人きりではない夕食だったので、私は嬉しくなって、いつもより料理の品数も一品増やして、量も少し多くした。

そうはいっても、元々が食うや食わずの生活なのだから、所詮はたかが知れている。

でも、ほんの少しでも彩りを加えて、様々な驚かされる事が続いた今日一日を彼と二人で祝いたかった。

私は、彼がこの一週間で渡り歩いた様々な場所でのエピソードに耳を傾け、その間に私が如何に心配したかという事を話した。

終始和やかなムードのまま夕食が終わると、他には特にやる事もない。

今日は私も彼も何となく気分が高ぶっていたのか、なかなか寝付けずに延々と他愛もない話をしていた。

彼にしてみれば好きな人との一週間振りの再会だし、私にしてもこの一週間の間に彼への思いはとても強くなっていた。

だから、お互いにこの一週間に溜め込んだお互いへの感情をそれぞれ伝えようとして、なかなか寝付けないのだ。

ふと、彼が横になったまま私を抱き寄せる。

そんなに何回も抱き寄せられた訳ではないけど、今ではそれがとても落ち着けるし安心できると感じていた。

お互いにお互いの背中に腕を回して体を密着させ、お互いの鼓動を感じあう。

ドク、ドク、と生きている証を、密着させた肌越しに感じ合うだけで、何だか彼と一体になってしまった様な不思議な昂揚感を感じていた。

思わず私は彼の背中をもっと引き寄せて、もっと深く密着したいと願う。

その頃、私の背中にあった手は徐々にお尻の方へ伝い、そこから不意に私の大切な所を彼

の指が這った。

「嫌！」

びっくりした私は思わず叫んでしまった。

彼も私の声にびっくりしたのか、慌てて手を引っ込める。

「ごめん」

小さく彼の声がした。

私だって、彼が何をしたいのかくらいは分かっている。

でも、そんな所を触られてしまったのは初めてだから、ちょっとびっくりしただけだ。

大体、私たちはもう『夫婦になって一緒に暮らそう』って約束した仲なのだから、彼が私の体を求めるのは当然だし、夫婦になると言う事はそういう事なのだ。

それに、とても恥ずかしくて彼の前では言えないけど、私だってもっと深く彼と溶けあって一つになりたい。

もっと彼の事を色々知りたい。

「いいよ」

私は言った。

その一言で彼はわかってくれると思ったけど、彼はそのまま動かなかった。

「ちょっとびっくりしただけなの。でも、私を好きでいてくれるから、そういう事をするんでしょ？」

「嫌じゃないの？」

私は更に重ねていったが、彼はまだ良く分かっていないらしい。

「好きな人にされるなら、いいの。夫婦になるって、こういう事でしょ？」

その言葉に、ようやく彼は私の唇に唇を重ね、熱く粘つく吐息を絡めあった。

そこから先はどちらからともなく、互いが互いの心と体を求めて激しく、そして優しく交錯する。

私たちは着物を脱いで生まれたままの体になり、素肌と素肌のままお互いの体に体を重ねていた。

温かい彼のぬくもりは私の素肌を甘く柔らかく愛撫し、私も彼の素肌を精一杯の情熱を持って丁寧に愛撫した。

慣れない私の愛撫にも、彼は心地よく感じていてくれるようだったし、彼は私が心地よくなるツボを知っているかのように、中途半端に私を高ぶらせては止め、また少ししてから高ぶらせると言った行為を繰り返す。

真っ暗な部屋の中でも分かる、ちょっと意地の悪い彼の笑顔。

ちょっと憎たらしいけど、残念ながら男と女の睦事では、私は彼に遠く及ばないらしい。

まるで私は彼の玩具の様に自在に操られ、思わず自分の耳を疑う様な淫らな声を上げてしまう。

恥ずかしくなって顔を赤らめてしまっても、彼は全く意に介さず、私の気持ちは更に高ぶって、さっきよりも更に恥ずかしい声を上げてしまう。

ああ、私がこんなに淫らな女だったなんて知らなかった。

こんなにも好きな彼と肌を合わせているというのに、こんなに淫らな、恥ずかしい声を漏らしてしまうなんて。

私がこんなに淫乱な女だって知ったら、彼は私を嫌ってしまうかしら。

でも、そんな私を彼は弄び、更に恥ずかしい思いをさせて、淫らな私の本性を露わにさせて喜んでいる。

意地悪な彼。

でも、こんなに意地悪なのに、こんなに好きな彼。

そして、彼のいいように玩具にされて、恥ずかしげもなくあられもない声を上げて、余りの気持ち良さに息を荒げて身悶えている私。

だって、彼が私の気持ちよいツボを刺激するから、勝手に声が出てしまうんですもの。

自分でもびっくりする様な淫らな声を上げてから、恥ずかしくて顔が真っ赤になって、頭の中も熱くぼっとなって、熱く甘い淫らな香りの中に蕩けてしまう私。

頭の中が痺れて、体中が痺れて訳がわからなくなってしまう私。

べっとりと粘りつく甘美な液体に体を沈めて、彼と絡まりあいながら一つのものに融けてゆく。

まるで私の体と彼の体が元々一つのものであったかのように、私は彼の体そのものを全身で感じ、また彼自身が私の一部でもあるような錯覚を覚えてしまう。

かと思えば、彼は私の意図せぬ反応で戸惑わせ、微妙なバランスで交錯する一体感と違和感の不思議な調律が、私の心と体を更に微妙な振動で揺さぶっていく。

私の中からは既に恥ずかしい感覚は消し飛び、今はただ彼ともっと一体になりたい、もっと彼の中に溶け込みたい、もっと彼を丸ごと包み込みたい、そんな気持ちばかりが私の体を支配していた。

もっと、もっと、激しく狂おしくも熱く淫らな、私とあなたの愛の形を積み上げて……。

私の意識が真っ白くなって燃え尽きてしまうまで……。

＊

おいらは彼女と熱く激しくも甘いひと時の余韻を、腕の中にいる彼女と共に愉しんでいた。

「最初は恥ずかしがってたのに、最後は凄く激しかったよ」

おいらはわざと彼女が恥ずかしがって照れる様な言葉を吐いた。

「いやん」

彼女は甘えた声で言うが、それ程嫌がっている風でもない。

それにしても、最初は恥ずかしがってばかりだと思ったら、最後はこちらが圧倒されるくらいに激しく淫らで、慎みと大胆さの微妙なバランスがおいらの感情を強く刺激した。

こんなお姫様みたいな子が……信じられない。

でも、見た目とは一見不釣り合いなそういった新たな魅力が、おいらの彼女に対する思いをますます深めてゆく材料となった。

こんなに綺麗で、可愛くて、親切で、我慢強くて、気が強くて、でも心配性で、怖がりで、情愛深くて、恥ずかしがり屋で、そして激しい、おいらだけの彼女。

彼女はどこまでも新たな魅力でおいらの心を掴んで離さない。

神様仏様、おいらの元にこんなに素晴らしい彼女を導いていただいてありがとうございます。

おいらは一生、彼女を幸せにする為に頑張ります。

おいらは腕の中に彼女を抱えながら、ぼんやりとそんな事を考えつつ眠り込んでいた。

それからしばらくの間は、おいらと彼女にとっては一番幸せな時期が続いた。

少なくともおいらにとっては幸せだったが、彼女がどう思っていたのかは、正直のところ良く分からない。

でも、彼女を見ている分にはとても幸せそうに見えだし、おいらの希望としても一番幸せを感じていて欲しかった。

昼間は二人で畑仕事に精を出し、夜は二人でお互いの心と体を貪りあう様に激しく睦みあう。

そんな生活が続いた。

しばらくして、毎夜ごとに睦みあっていては翌日の仕事に差し支えるので、回数を減らそうと言う話になったが、それでも二人はいつも寄り添って眠っていたし、その場の勢いでつい睦みあいに発展してしまう事も珍しくなかった。

その様にして、多少疲れ気味ではあったものの、とても充実していた日々がこんなにも突然途切れてしまうなんて、おいらには想像もつかなかった。

災厄は突然やってきた。

いつものようにおいらが彼女と共に畑仕事に精を出していたところ、ずっと姿を見せていなかったあの二人が現れた。

かつてはおいらと良く行動を共にしていた、あの二人だ。

二人は、小道のすぐ近くで相変わらず畑作業をしていた彼女を見つけると、口々に酷い罵声を浴びせて石礫を浴びせてくる。

「痛い！」

ああ、彼女は呻き声を上げてそのまま蹲ってしまった。

幾ら以前はおいらも一緒になってやっていた事とはいえ、立場を変えて見てみるとこれは本当に酷い事だ。

しかも、今やおいらにとって一番大切な人を傷つけるなんて。

「やめろ！」

おいらは激しい憤りの余り、手にした鍬を振り上げて二人に襲い掛かっていた。

二人は最初おいらの事を彼女の父ちゃんだと勘違いしていたらしく、酷く驚いていた様だが、やがて事情が飲み込めるとおいらにも罵声を浴びせ始めた。

「そうか。お前村から逃げ出したと思ったら、こんな所に紛れ込んでたのか」

「さすがに村の禁忌破りの罪人の息子と、流刑者の娘は同じ罪人同士で馬が合う」

「お前もしかして、この子を強引に手箒めにしてここに潜り込んだのか？」

「どうだ、この子は床ではいい声で鳴くのか？」

二人が口々に酷い事を言う。

おいらの事ならともかく、彼女の事を酷く言ったり、悪く言ったりするのは許せない。

確かに彼女が床ではいい声で鳴くのは事実だが、それはおいら達だけの秘密だし、それはおいらと彼女が好き合っているからだ。

それに、彼女は普段も可愛らしい声だ。

「これ以上彼女を侮辱したり、酷い事をしたらおいらが許さない！」

おいらは鍬を振り回して、夢中で二人を追い払っていた。

もしかしたら、二人に対する殺意も合ったのかもしれない。

そのくらい必死だった。

かつてはあの二人に流されて、何となく彼女を傷つけたかも知れないが、守るべきものが出来るという事はこんなにも強くなれるのだ。

もう二度と過ちは犯さない。

この身に代えても彼女は守る。

そんなおいらの決意に尻込みしたのか、二人は口々に捨て台詞を残して消えた。

おいらは畑で蹲っている彼女をとりあえず小屋に運ぶと、今日はもう仕事をしなくていいから小屋に居る様に言った。

「ありがとう。ちゃんと約束通り助けてくれたんだね」

珍しく彼女からおいらにしがみついて来た。

彼女はきっととても怖かったのだろうか。

まだ体が小刻みに震えているみたい。

「当たり前だ。おいら達は夫婦になったんだろう？」

彼女の体の震えが早く治まるように、早く安心して、また素敵な笑顔を見せてくれる様に、おいらはしがみついてくる彼女を出来る限り丁寧に優しく、両腕を回して包み込んだ。

「あなたはそういつてくれたけど、以前仲間だったあいつらが来たら、あなたがどう変わってしまうのか、心配で、心配で……」

心なしか声も震えている。

おいらには少しショックだったが、でも逆にこれで彼女の心配が杞憂だったと、はっきりした行動で証明した事になる。

「おいらは何も変わらない。そんなどうしようもない心配は忘れさせてあげる」

彼女はこんなにも弱く脆かったのだろうか。

おいらが誤って石礫をぶつけてしまった時の、刺すように鋭く睨みつける彼女の眼は今でも忘れられない。

でも、今の彼女にはその面影すら感じられない。

本当は脆くて、弱くて、儚い女の子なのかも知れない。

おいらを信じてくれるから、気を張り詰めていないで、素の弱いままの自分をさらけ出してくれているのかも。

「うん。あなたは私を、体を張って守ってくれた……父さまと同じ様に。ありがとう。でも、余り乱暴はしないで……厄介な騒動に巻き込まれてあなたを失ってしまったら、それこそ私はもうどうにもならないのだから」

今の彼女は、まるで父親に甘える幼子のようなようだった。

おいら達が彼女から奪ってしまった父ちゃんの代わりに、彼女は俺に甘えてくれているのだ。

おいらはそのまま彼女の気が済むまで抱きしめてあげて、結局その日はそのまま仕事を切り上げる形になってしまった。

次の日は、再びあいつらがやってきて彼女を石礫で打たせる訳には行かないので、彼女にしばらく仕事を休むように言った。

でも、彼女は聞き入れてくれなかった。

「あなただけに仕事を押し付けては申し訳ないし、もし私のいない所であなたが酷く打たれていたらと思うと、やっぱり私一人で休めない」

そんなに信用されていないのか……彼女が気遣ってくれる気持ちは分かるが、そこまで好きな女の子に信用されない男というのも情けないものだ。

「おいらはそんなに弱い男じゃない。おいらがあのだ二人に負けると思うか？」

おいらはちょっとムッとして言い放ったが、彼女が返してきたのは意外な返事だった。

「あなたにすっかり頼りっぱなしの私なんですから、あなたの強さは良く知っていますし、信じてます。でも、あいつらは卑劣だから、正直なあなたをあっという手で陥れるかも知れない。それが怖いんです。それに、あいつらと争うという事は、あいつらと同類になってしまう様なものだから、あなたのそんな姿を見たくない。ましてや、あいつらに傷をつけたり、まかり間違えて殺めてしまったら、あんなつまらない連中の為にあなたが罪人になってしまう事に耐えられないんです」

彼女の言う事には一理あった。

しかし、それではあいつらの襲撃にどう立ち向かえばいいというのか。

話して分かる連中ならば最初からそうしている。

仮に、おいら自身はどうでも良いとしても、彼女はどうなるのか。

あいつらに酷く痛めつけられて蹂躪されていくのを、ただ指を咥えて見ていろと言うのか。

そんなのは嫌だ。

それに、この世の中にはどうしようもない事もある。

おいらと彼女が無事に生き抜いてこそ、色々な事が言える人生だ。

その最低限の条件を守る為にも、降りかかる火の粉は払わなくてはならない。

そういえば、彼女の父ちゃんは、おいら達が幾ら礫を投げて、一切反抗せずに自分の背

中で無数の礫を受け止め、そして死んだ。

彼女は結局その父ちゃんの娘だから、そういう事を言うのだろうか。

それとも、流刑者の父ちゃんを抱えて散々苦労したから、罪人の悲惨な人生を身を以って知っているというのだろうか。

それでも、やつらに良いようにいたぶられて殺されては、それこそ意味がない。

それがおいらの結論だった。

＊

その日、やっぱり二人はやってきた。

争いはダメ、争いはダメ……私が背後で祈る中、彼が二人に向かい合った。

「そのう、俺達が悪かった。ただ、誤解されない様にちゃんと話しておきたいんだが……」

二人の雰囲気は昨日までと違う。

「そのう、男同士の話って訳にはいかないか。お前の……彼女が居ると……恥ずかしいじゃないか」

私が何か関係あるのだろうか。

二人は頻りに私の方に目配せしている。

「済まないけど、しばらく小屋に入っていてくれ」

彼に指示されて小屋に引き上げる私の背後では、それでも満足できないからと彼を連れ出そうとする二人の気配がある。

何となく嫌な予感がする。

あれだけ散々私たちを痛めつけてきたあの二人が、そう簡単に改心する筈がない。

でも、彼だって、私たちに散々酷い事もしたけど、今では私の事を好いてくれて、私を助けてくれて、私を守ってくれる。

もしかしたら、あの二人も彼のように改心したのかしら。

彼と夫婦になった様には行かないけど、でもお友達として仲良くお付き合い出来るのかしら。

そうだったらこれほど素晴らしい事はない。

でも、私と彼の心が通じ合うにはきっかけがあった。

酷い傷を負って倒れていた彼を、私が助けて看病したから。

その時に、お互いを知る為にたくさんのお話をしたから。

それに比べて、あの二人とはそういう接点はない。

それとも、彼は元々二人の事を良く知っているのだから、彼とあの二人が仲直りをして、私も彼と夫婦だから仲良くしてくれるのだろうか。

きっとそう。

でも、何故か嫌な予感がする。

もう二度と酷く苛められる事もなく、みんなで仲良く笑って暮らせれば、こんなに素晴ら

しい事はないのに……。

そんな淡い私の期待を裏切って、あの二人が小屋に入ってきたのは、それからしばらく経った頃だった。

「彼はどこ？」

私の問いかけに、二人は下卑た笑いを返す。

「殺めたりしてないから心配するな。ちょっと眠ってもらっただけだ」

「お前、あいつと夫婦になったんだってな」

「確かに、昔はただの汚らしい女の子だったけど、こうやって見ると可愛いな」

その時、私は彼の身に何が起こったのか、そしてこれから私の身に降りかかる運命が分かってしまった。

「嫌！」

私は慌てて二人を掻い潜って逃げようとしたが、力強い男の手に呆気なく引き戻される。

所詮、彼に守ってもらわなくては呆気なくくず折れてしまう、弱く脆い私一人では、男二人を相手になす術もない。

ああ、このままでは、『身も心もずっと一緒』と誓った彼との約束が破られてしまう。

私たちは夫婦の仲を引き裂かれ、私はこの先二度と彼と顔を合わす事も叶わぬ裏切り者になってしまう。

彼だけ、彼だけって、誓ったのに。

そんな私の悲痛な思いを全く気にかけずに、二人は私をあっさりと裸に剥いて、良い様に弄んでゆく。

ああ、愛しのあなた、この獰猛な獣達に呆気なく蹂躪される前に、早く私を助けにきてください。

極楽浄土で私を見守ってくれている父さま、どうか彼と私に力をお与えください。

どうか、この二人の暴虐な振る舞いを止められる力を、お与えください。

そんな私の切なる願いが届く筈もなく、しかも、日頃からの彼との度重なる睦事から全身が敏感になっていた私は、身の毛もよだつ二人の荒々しく乱暴な愛撫にも反応してしまう。

そして、遂にあの恥ずかしい声まで上げて、二人を悦ばせてしまった。

私は好きでもない男に強引に手箒めにされているのに、気持ち悪くて、苦しくて、悔しくて、後ろめたくて仕方がないのに、私の体は押し潰されそうになっている私の心などお構い無しに、男達が刺激する肉の快感に身を振らせている。

男達が私の気持ちよくなってしまうツボを刺激する度に、私の口から、男達を悦ばせる甘く切ない声が漏れ、その度に男達はますます調子に乗って、私の体中のあらゆる快感のツボを刺激し続ける。

私は、自分の体の中には、自分自身以外にも、もう一匹の淫らな獣が居る事を、今日始めて知った。

心の中はこんなに寒く、冷たく、貧しく、何の希望も見出せずに、ただただ嵐が過ぎ去るのを待つ様に、悔しさを奥歯に噛み締めながら、男達の凶行が止むまで耐え続けるしかない

いうのに、私の中の淫らな獣は更なる刺激を求めて勝手に反応する。

勝手に熱く火照って高ぶってしまっている。

ああ、これでもう二度と、私は彼と顔を合わせる事も叶わなくなってしまった。

私は彼を裏切り、乱暴な男達の容赦ない陵辱にあっても、なおかつ淫靡な悦びの声を上げ、もっともっととせがんでいる。

こんなにはしたくない女を、彼はきっと嫌いになってしまうだろう。

こんな裏切り者の女を、彼はもう二度とその強く温かな腕の中に迎えてはくれないだろう。

好きでもない男の陵辱に悦んでしまうなんて、まるで花街の春を売る女達そのものだ。

いや、彼女たちはそれを生業にしているだけで、私の様に無理矢理組み敷かれても恥ずかしい声を上げ続ける訳ではない。

今の私はそれ以下の、色の欲に飢えた獣みたいなものだ。

私が望んだ訳ではないのに、一刻も早くここから抜け出したいのに。

男達は私の中に強引に押し入り、踏みつけにし、汚し、私の中の何もかもを片っ端からバラバラに叩き壊してゆく。

それでもまだ飽き足らないといった様子で、一度踏みつけにしたものを、二度、三度と繰り返し踏みつけ、一度叩き壊したものを更に粉々に打ち砕く。

今はただ、私は私自身が憎かった。

私を良い様に弄ぶ二人も憎かったけど、その二人に良いように弄ばれても、それで呆気なく恥ずかしい悦びの声を上げてしまう私が憎かった。

互いに好きあう気持ちもないのに、お互いに身も心も一緒になろうという気持ちもないのに、敏感なツボを刺激されると勝手に身悶えてしまう自分が憎かった。

もう、彼をまともに見る事なんて出来ない。

もう、彼と一緒に居る事なんて出来ない。

きっとこんなに淫らな私を、極楽浄土の父さまも落胆して見ているに違いない。

きっと誰もが私を指差し、嘲り、蹴飛ばし、唾を吐き、足で踏みつけ、汚物を見る様な目で見て、みんなが私の事を避けて通る。

私はそんな最低の女。

もう、私の心の中は何もかも粉々に壊されて、その空間を埋める様にぽっかりと空いた真っ黒な大穴があるだけだ。

何も思わず、何も感じず、何もない空間に、冷たく乾いた風が吹き抜けるだけ。

そこには何の彩りもない。

豊かさもない。

暖かさもない。

もう、生きているのか死んでいるのかも分からない。

でも、せめてこのまま放っておいてくれれば、良い思いを何も感じなくても、その分嫌な思いも感じなくて済むのかもしれない。

嫌な思いだけはもう堪忍して下さい。

＊

不覚にも、あの二人に崖から突き落とされたとおいらが気がついたのは、日が西の山に沈もうとしている刻限だった。

おいらは彼女の事が心配で、あの二人に何か酷い事をされてやしないかと、ただそれだけが気になって、節々が痛む体を引きずって小屋へ急いだ。

幸いにも骨は折れていない様だったが、擦り傷や打撲は至る所に負っていた。

それにしても、おいらを騙したあいつらだけは、絶対に許せない。

彼女の無事を確認したら、今度こそその罪の報いを徹底的に受けさせてやる。

とにかく、今は彼女の事が一番の気がかりだ。

また石礫を浴びていないだろうか。

痛い思いをしていないだろうか。

嫌な思いをしていないだろうか。

こんな事で彼女を守れなかったら、おいらは彼女との約束を破った事になってしまう。

今度彼女との約束を破ったら、きっとまた彼女に嫌われてしまう。

そしてもう二度と、絶対に、彼女はおいらの方に振り向いてくれなくなる。

おいら達が殺めてしまった彼女の父ちゃんにも、彼女を絶対に守ると誓ったのに、その約束も果たせなくなってしまう。

夕日色の光が僅かに差し込む小屋と畑には、全く人氣がなかった。

おいらは妙な胸騒ぎを覚えたが、その嫌な予感を強引に振り払って小屋に入った。

小屋には彼女が壁にもたれかかる様にしていた。

「大丈夫だった？」

彼女を目の前にしたおいらは一瞬言葉を失い、次いで彼女を守りきれなかった自分の不甲斐なさを嘆き、あの二人に対する激しい憤りが噴きあがった。

彼女はあいつらに強引に手箒めにされ、また酷い暴力を受けていたのだ。

少し前まであんなに可愛かった顔が所々変色して腫れ上がり、着物の前はだらしく肌蹴てしまっている。

その肌蹴た着物の隙間から覗く彼女の大切な部分とその周辺には、奴らの凶行の痕跡が、鼻を突く淫靡な匂いと共に克明に刻まれていた。

ああ、何という事だ、彼女がこんな酷い目にあっているなんて……。

おいらは、彼女が乱暴された時のやりきれない思いを感じて泣いた。

いざという時には何の役にも立たずに、彼女がこんなに酷い目に遭う隙を作った、自分の至らなさ、甘さ、愚かさに泣いた。

これでは彼女にも申し訳が立たない。

彼女の父ちゃんにも申し訳が立たない。

もう絶対にも彼女に嫌われてしまう……『守ってくれるっていったのに……嘘つき!』と咎められて。

でも、せめてそういわれる前に少しでも彼女と一緒にいたい、彼女を感じていたいと思って、おいらは呆然としたままの彼女を抱きしめた。

彼女を腕の中に抱えて、彼女が凶行に晒された時に感じたであろう、様々な嫌な気持ちを思って泣いた。

そのまま感極まって思い切り抱きしめると、彼女が腕の中で微かに蠢いたので、おいらは一旦腕を解いて、今朝とはすっかり変わってしまった彼女を見た。

「嫌! 見ないで」

彼女はおいらの顔を見るなり、そのまま顔を背けてしまった。

余程酷い目にあったのだろう。

それとも、おいらが守れなかったから、余程嫌われてしまったのか。

「ごめん。約束を破ってしまって、守れなくて……」

おいらはそういうのが精一杯だった。

ここで何があったのかを理解した時点で、彼女に嫌われてしまう事は覚悟していたが、それでも、自分が思った事、やった事を説明して、もし彼女が妙な誤解をしているなら、解いておきたい。

その上で嫌われるなら、それは仕方のない事だ。

「お願いだから、話だけは聞いてくれ。おいらはあの二人に『謝りたいけど、こうなった理由を説明するから許して貰いたい。お前達が夫婦となった今では、彼女の前でその理由を話すのも恥ずかしいから』といわれて、おいらは奴らに崖に誘い出されて、そのまま崖の下に突き落とされた。間抜けだと思うかも知れないけど、おいらはお前の『争いはダメ』って声を聞いたような気がするんだ。だから、暴力は最後のギリギリまで我慢しようと思ってたら、こんな事になってしまった。でも、幾ら言葉で何をいっても、おいらはお前を守れなかった。約束を破った。これで嫌われるなら、どうしようもない……」

そして、おいらは意を決して立ち上がった。

「これから、あいつらのところへ行ってくる。お前をこんなに酷い目に遭わせた報いを、ちゃんと受けさせるんだ」

「待って……」

彼女はおいらの足にすがり付いてくる。

「私は、あなたに守っていただく価値のある女じゃないの。あなたと夫婦でいられる様な女じゃないの。お願いだから、私なんかの為に、お縄になる様な真似だけはしないで……」

彼女のすすり泣くような声に、おいらはハッと息を飲んで、そして再び彼女に向き直った。

「どういう事? おいらが守るなんて迷惑? もう嫌気がさして夫婦でいるのも嫌になった?」

おいらには彼女の言う事が理解できなかった。

おいらが責められるならまだしも、彼女がそこまで卑屈になる意味がわからない。

それとも、あいつらはそこまで深く彼女を傷つけたという事なのだろうか。

もしそうならば、おいらは絶対にあいつらを許さない。

「迷惑なんてとんでもない。私はあなたと夫婦でいてよかったと思います。今でもあなたが好きだし、感謝もしているんです。でも、私とあいつらの間に何があったかを知ったら、私は絶対にあなたに嫌われる」

どういう事だ？

彼女はあいつらに強引に手箒めにされて、暴力まで振るわれたのだ。

おいらの彼女への気持ちが、そんな事で簡単に揺るぐ訳がない。

不可抗力とはいえ、あいつらと結ばれてしまった事をいっているのなら、それこそ彼女が責められる謂れはない。

全ての報いはあいつらが受けるべきだ。

「おいらはお前が手箒めにされた事なんか気にしない。それはすべてあいつらのせいで、あいつらがその報いを受けるべきなんだ。可愛くて弱いお前にとっては抗う事の叶わない事故なのだし、そんな事くらいでおいらのお前への思いは変わらない。お前がずっとおいらを好きでいてくれるなら、その思いはおいらも同じだ。今までと何も変わらない。但し、あいつらだけは、絶対に許さない」

その言葉に納得してくれたと思って立ち上がると、彼女はまたしてもおいらを引きとめた。

「どういう事だ。そんなにおいらの言葉が信じられないのか？ そりゃ、おいらはお前を守れなかったけど、だからこそ、明日あいつらがもう一度ここへやってきて、可愛いお前に酷い事をしないように、これから決着をつけてくるんだ」

「違うの。……分かりました。そこまで言うのなら、ちゃんとお話しますから。私も、こんなにも愛しているあなたに嫌われるのは辛いですけど、あなたが私なんかの為に縄に掛かるのはもっと耐えられませんから、お話します」

彼女は一体何をいっているんだ。

なぜおいらがこんなにも好きな彼女を嫌わなくてはいけない？

余程話し難い事なのだろうか。

彼女が一旦深呼吸をして、それからおずおずと話し始めた。

「私があのだ二人に襲われた時、とっても嫌で、怖くて、あなたに『早く帰ってきて』って心の中でお願ひしました。極楽浄土で見守ってくれている父さまにも、『あなたと私に力をお与えください』ってお願いしました。二人は私をとて乱暴にしました。でも、私の気持ち良くなるツボを刺激されたら、あの恥ずかしい声を上げてしまったんです。それが二人を悦ばせたみたいで、その後も数限りなくはしたない声を上げて、身悶えてしまいました。心の中では嫌で嫌で仕方なかったけど、早くあなたに助けに来て貰いたかったけれど、体が勝手に反応してしまいました。私は、そんな淫らな女……強引に手箒めにする男の振る舞いにも悦んでしまう、そんな淫らな、汚らしい女だと気付いたんです。ですから、私にはあなたと夫婦でいられる資格なんてない、花街で春を売る女達よりも最低の女なんです。こんなに恥ずか

しい話は、もうこれっきりにして下さい。そして、私の事を『どうしようもない裏切り者』と蔑んで、放って置いてください」

彼女はそうして自分の受けた屈辱の体験を一気に吐き出すと、そのまま泣き崩れてしまった。

おいらは彼女に酷い事を聞いてしまったのだろうか。

体が勝手に反応するというなら、花街に夜毎通う男達はどうだ？

そんなものは男でも女でも変わらない。

それよりも、彼女が散々嫌な思いをして、おいらがそれを助けられなかった事の方が重要だ。

あいつらが彼女の恥ずかしい声を聞いてしまったのは、ちょっと複雑な思いもあるが、その責めはすべてあいつらが負うべきだ。

やはり、これは彼女が止めようと、絶対にあいつらを許す事は出来ない。

これまでの数々の仕打ちの報いを受けさせるという意味でも、明日からの生活を脅かす障害を排除するという意味でも。

「お前がどれほどの屈辱の体験をして、苦しんだかという事がわかった。辛い体験を告白させてすまなかった。おいらの気持ちはそんな事では変わらないよ。お前が変わらずにおいらの事を好きでいてくれる限り、おいら達は夫婦である事に変わりはない。でも、あいつらだけは許せない」

おいらは、今度こそあいつらの息の根を止めに行く為に立ち上がる。

「例え嘘でも、私を変わずに好きと言ってくれてありがとうございます。その言葉だけで、とても嬉しい。でも、まだ分かってもらえないのですか？」

「あいつらの事は、最早お前だけの問題ではなくて、おいら自身の問題でもある。あいつらを今のうちに何とかしない限り、おいら達の明日もない」

おいらはその言葉を最後に、あいつらにこれまでの全ての報いを受けさせる為に、小屋を後にした。

「待って！」

彼女の悲痛な叫びに後ろ髪を惹かれる思いだったが、おいらはそのまま後ろを振り返らなかった。

ここで振り返れば、一度決めた決心が緩んでしまって、いずれ更に大きな災厄となっておいら達に降りかかるに決まっている。

おいらがやっと見つけた、とっても素敵な、そしてとっても大切な、おいらだけの守るべきものを守る為に、今は後に引く訳には行かない。

おいらはそう心に念じて、村へと向かう夜の闇に紛れた。

*

この所、毎晩の様に同じ夢を見る。

昔の山間の農村、可哀想な境遇の少女に心を引かれ、最初は過ちを犯しても、いずれ自らの過ちに気付く、そしてお互いに愛し合う。

しかし、二人のささやかな幸せの日々は呆気なく打ち砕かれ、悲劇的な結末に向かう。

もう何度も見て、かなり細部まで色々と思い出せる。

同じ夢を見るという事には、それなりに意味があるのだろうが、怪しい夢占いといった類いにその答えを求めるのは見当違いだと思う。

気になる夢ではあったが、とりあえずは後回しにして、職場に向かう。

今日は職場に新しい人がやってきた。

綺麗な人で、思わず目を奪われた。

転職組の中途採用者だが、聞いた話ではかなりの経歴の持ち主らしい。

早速、次の週末には職場主催で彼女の歓迎会が開催された。

職場近くの居酒屋で一次会が行なわれ、綺麗だが一見几帳面で近寄り難い雰囲気のある彼女が、実は可愛い一面を覗かせたりもした。

そのまま大半のメンバーが二次会で一時間ほど過ごしてから、三々五々解散する事になった。

たまたま彼女と帰る方向が同じだった事もあって、一緒に帰ろうと連れ立って、そのまま職場の面々と別れたのだが、彼女に少しだけカウンターバーに誘われた。

「実は、さっきの夢の話なんですけど、もう少し伺いたいと思って」

二次会の時に少し眠そうにしていた所を彼女に見られてしまって、言い訳がましく『最近よく同じ夢をみて魔されるので寝不足気味だ』という話をしたのだった。

ぱっと見のイメージから、彼女がそういう夢とかいった事に興味を示すとは意外だったが、まあ、元々気になっていた人と二人きりというシチュエーションも美味しいと思って、眠かったが付き合う事にしたのだ。

俺は夢のアウトラインをざっと話して聞かせた。

「あの、その夢に出てくる女の子って、瞳がクリッと丸くて、男の子が『瞳がクリッと丸くて、可愛いね』っていいます？」

「えっ！　そうだけど、なんで？」

「あの、多分、同じ夢を、私も見るんです」

俺はちょっと驚いて、思い出せる限りの夢の詳細な部分を彼女に話して聞かせると、彼女もほぼ同じ内容の夢を見ている事がわかった。

ただ、俺は夢の中で女の子と夫婦になる男の子の視点で、彼女は女の子の視点で夢を見ているらしい。

ここまで同じ内容の夢を、別の人間が何度も繰り返し見続けるというのは、ただの偶然とは思えない。

「あの、それから、今思ったんですけど、私が転職する様になったのも、今の職場でお世話になる経緯も、何となく偶然ではない気がするんです」

彼女の話によると、転職先の反応についても、最初は不採用通知が来た後に実は採用との

連絡があったり、希望の職場に配属される予定が急遽変更になったりと、不可解な体験をしたらしい。

「それで、あなたを一目見た時に、思ったんです。『この人だ』って。最初は何がこの人なのか分からなかったんですけど、きっと夢が呼んでいたんですね」

「夢が？」

「夢を通して繋がっていたというか……」

確かに、俺と彼女をつなぐ接点は夢しかない。

でも、それがどういう意味を持つのだろうか。

「あの、それから、こんな話不躰ではしたくないと思われるかも知れませんが、私、あなたの事が気になって仕方が無いんです。まだ出会ったばかりで何も知らないのに、あなたの事を色々知りたくて、それで今も無理にお誘いしたりして……」

「そんな、こちらこそ、あなたの事は気になっていたし、そんなに興味を持ってもらって光栄です」

その後再び夢の話をしばらくして、その日はそのまま別れた。

それから程なく俺と彼女は愛し合うようになり、二年の交際を経て結婚した。

彼女と出会った頃には分からなかったが、今では何となく、彼女と俺がなぜ同じ夢を見て、偶然とは思えない不思議な経緯で惹かれあったのか、その理由が分かる様な気がする。

きっと、あの夢はただの夢ではなく、何百年か前にどこかの農村で実際に起きた事件だったのだ。

そして、あの時お互いの思いを全う出来なかった、あの夫婦たちの未練とお互いへの情愛が、きっと未来の俺達を通じて、数百年越しのその思いを果たそうとしているのだろう。

理由なんて無い。

ただの直感に過ぎない。

でも、俺も、彼女も、その思いは共通している。

まるであの時果たせなかった夫婦の思いの分までをも、まとめて謳歌しようとでもしている様に、俺達はとても幸せだった。

ちなみに、俺達が結婚したのを境に、二人ともあの夢を見なくなった。

そして、今彼女のお腹の中には、俺達の子供が宿っている。

俺達の思いに、あの時果たせなかった夫婦たちの思いをも重ねて、俺達の子供は担っているのだろう。

きっと、瞳がクリッと丸くて、可愛い子に違いない。

(了)

HP 【Blankfolder】

<http://blankfolder.huuryuu.com/>

<http://blankfolder.blog.shinobi.jp/>

Copyright(C) 2006-2007 【Blankfolder】 こりん, All Rights Reserved.

本ファイルの二次配布はご遠慮下さい。

本作品へのお問い合わせは上記 HP にて受け付けております。

本作品に対するご意見、ご感想は上記 Blog でもお受けしております。